



地味チョウシリーズ⑪

シロオビヒメヒカゲ

Coenonympha hero



出会い～生態観察

シロオビヒメとの出会いは中学1年の時だったはずですが、それまではシロオビヒメの分布しないところにいたからです。中学1年で札幌からオホーツクの紋別に引っ越し、いっぴしの昆虫少年だった私は、あこがれのヒメウスバやカラフトヒョウモンなど道東の北海道特産種を追いかけてまわったのです。紋別公園から大山にかけてがその頃のマイフィールドでした。このことは「*新刊本」に書かせてもらいました。紋別で採集したシロオビヒメの標本はその後引っ越した下関でカビだらけになりますが、全国の昆虫少年・青年と交換で渡した紋別の標本は健在でしょうか。

その後の再会は北大虫研時代で、たしか丸瀬布だったと思います。虫研時代はその他十勝方面・釧路方面の遠征時に出会ってはいませんが、生態観察というスタイルはまだ確立はしていませんでした。大学を出て夕張に赴任、しばらくして「道新本」をつくり始め急きょ幼虫探しを始めました。夕張でから富良野に異動してはじめて幼虫を見つけました。それが1985年5月24日の写真です。麓郷街道と呼ばれる舗装道路の脇の貼り芝にいました。今思うと良く見つけたと思います。野外卵も含めなんとかページを埋めることができました。(下中)ちなみに蛹の写真は渡辺御大から借用しました。終齢幼虫もその後撮影しています。右下です。これは「完本」に採用されました。

その頃の富良野にはシロオビヒメは普通でした。我が家にも時々飛んできました。とくに朝日が丘公園(なまこ山)のジャンプ台跡地の草原にはたくさん飛んでいて産卵も普通に見られました。今はなぜか激減してしまいました。これについてはまた後で考えてみましょう。



「*北海道の蝶の生活史図鑑蝶好きの12か月」から



▲葉に止まる♀ (1985 アオナシ管内上士幌町十勝三股)



▲産卵上の卵



▲蛹本後の中巻幼虫



▲地中に下がる蛹

「北海道の蝶」(1986道新)から



法面のイネ科植物を食べる終齢
1986・5・12富良野「完本」から

飼育に挑戦 標茶にて

「道新本」の後の富良野での蝶探索はのんびり進めていましたが、2005年に小樽へ、2007年に標茶へと異動になることで、まわりの風景が変わってからちょっとやる気が出てきました。標茶は道東の蝶の本場でカラタカやチャマなど愛らしいチョウたちについて幼生期まで含めての観察にのめり込んでいきました。シロオビヒメも再三紹介している軍馬山の、冬はスキーができる斜面にたくさん飛んでいました。あまりにも広い草原なので幼虫はなかなか見つからないので飼育してみることにしました。やはり羽化した姿は目玉模様の周りのオレンジ紋幅広の白帯、実に美しいものでした。



軍馬山の春 草原にシロオビヒメが躍る



縁毛が美しい♀ 2008・6・15 標茶



終齢幼虫 2009・5・14 標茶産



羽化個体 2009・6・8 標茶産

東川キトウシ公園での生態観察

2010年、標茶から旭川に異動。シロオビヒメはなかなか出会えません。それよりもヒメギフやリンゴシジミ、カシワ林のゼフのほうが魅力的だったのです。ウラジャノメを楽しく探していた時に、キトウシ森林公園でばったり？シロオビヒメに出会いました。林道を切り開いた斜面に洋シバが貼り付けてありそこに多数のシロオビが見られました。そこでその細い芝を目を凝らし、居るはずだと念じながら、丹念に探していくと越冬前の幼虫をついに発見することができました。細い葉に見事にカムフラージュしています。その後何回かチャレンジしているうちに効果的な採集法を産みだしました。崖にもさっと生えている芝の株の下にネットを置いてシバの株を髪の毛をかきむしるようにバサバサするとポロポロとネットインします。雪が降り始める11月に入るまで追いかけて、3～4齢幼虫で越冬に入ることを確かめることができました。幼虫も多数集まったので植木鉢に入れ越冬野菜のように雪の下に埋め集めて春を待ちました。



キトウシの生息地 斜面に生えている張芝が食草



発見！2齢幼虫 2010・8・22 東川



摂食する2齢幼虫 2010・8・22 東川



3齢幼虫 2010・10・2 東川



越冬直前の3齢幼虫 2010・11・14 東川

東川キトウシの飼育個体①

東川キトウシでは31頭の幼虫を持ち帰り、越冬野菜方式で庭の畑の雪の下で越冬させ、翌年無事27頭が羽化しました。終齢幼虫にも個性があり、標茶では見られなかった、背中がピンク色を帯びるのがいました。なんかおしゃれです。前蛹にも基線にピンクラインが入っています。枯れた茎に次々ぶら下がる蛹たちにも個性が見られました。背中と翅の部分に黒いラインが入っているのですが、それが細いものからほとんど消えてしまうものまでありました。幼虫～蛹の色彩やデザインもそれぞれ個性が尊重されているようです。



終齢幼虫 2011・5・15 東川産



前蛹 2011・5・22 東川産



蛹の斑紋変異
東川産

東川キトウシの飼育個体②

羽化した成虫たちにも個性が溢れていました。裏面がとにかく美しい。眼状紋のオレンジが縁を縁取る銀のラインもいいのです。その中に白帯が妙に狭い個体も結構な割合ででてきました。野外ではこんな個体はいなかったと思います。裏展翅の標本を作って並べてみました。以前標茶で羽化した標本と比べてみましょう。標茶のものは前翅の白帯も幅広く*latifascata*亜種の特徴がでています。キトウシのものは標茶産と変わらないものもありますが、全体的に白帯が細い傾向が見られ★の個体など定山溪亜種*neoperseis*に見えるものもありました。

羽化した♀ 2016・6・5 東川産



東川産 2011年



標茶産 2009年

続・東川キトウシでの観察 野外での蛹化を確認！



素晴らしかったマイフィールド
キトウシ森林公園 2016・5・18

東川キトウシ公園のシロオビヒメの生息地は偉大でした。「完本」発刊の前年2015年にも越冬前幼虫を確認しましたが、おおむね4齢で越冬するようでした。さらに2016年には5月に2回、6月に2回出向いて野外での蛹化について観察することができたのです。忘れもしない5月18日、公園の中腹、ヒメギフの卵やツマキの産卵などを撮影し、例の生息地に入りました。ミズナラなどの若葉も伸び始め、斜面には例の洋芝の株から若い芽が伸びはじめています。新葉の周りには枯れた葉がボサボサ垂れています。食痕がついている株の下を覗くとなんと前蛹がぶら下がっています。へえーっ、こんなところにぶら下がるのかと同じようなところを注意してみてもう二つ見つかりました。よーし、これは蛹までいけるでしょ。ピンテを付けてその後3回見に行って下のような写真をとることができたのです。ちなみに蛹の期間は約4週間もありました。食草は専門家によってハガワリトボシガラと同定されました。ここは胸が高まる素晴らしいフィールドでした。過去形なのは今は環境が変わって絶滅してしまったからです。これについてはまたあとで。



前蛹発見！ 2016・5・18



蛹 2016・5・25



羽化直前の蛹 2016・6・15

消えたシロオビを探して

東川キトウシの生息地では2018年頃からどんどんシロオビの数は減っていきました。2020年にはもう絶滅したと思います。それは斜面にあったハガワリトボシガラの群落が消えてしまったからです。林床にはササがはびこりミズラナやタラノキなどの木が侵入し森林的な環境に移ってしまったからだと思います(右写真参照)。前に紹介した富良野のジャンプ台跡の草原も植林され、芝はススキやササに変わり絶滅しました。三国峠でベニヒカゲやクモマベニを探していたところ、広大な法面で出会いました。土止めブロックの中に植えられた芝(ナガハグサ?)で発生しているようです。カラタカも飛んでいるのですが、なにかしっくりきません。本来の生息地はどういう所なのでしょう。



2010年の状態



2021年の状態

国道法面の生息地 2019・6・30



三国峠のシロオビヒメ 2019・6・30



アポイのシロオビヒメ

旭川・富良野周辺のシロオビヒメの法面のイネ科植物に依存する生息地について紹介してきましたが、そもそも本来の生息地はどういう環境なのでしょう。そこでアポイのシロオビヒメについて考えてみます。アポイはもちろんヒメチャの調査で足しげく通っているのですが6月にはシロオビヒメとも出会うことができます。ヒメチャの生息する高山草原や山麓とくに新道コース・幌満林道などで出会うことができます。ヒメチャの生息する7合目ではヒメチャの食草のキンロバイに吸蜜している個体があります。この草原での食草はミヤマウシノケグサではないかと思っていますが、幼虫は未確認です。ヒメチャの調査でいつもへろへろになるのでシロオビの生態観察の方はまだ手を出せない状況です。幌満林道の崖部にもいますがここはエゾツマも生息していて、日高のチロロ林道に雰囲気似ています。新道コースの個体は登山路脇の草むらに潜って産卵行動していましたがまだ食草は未確認です。成虫の斑紋は比較的白帯が狭い傾向があります。アポイのシロオビヒメはなにか本来の生息環境を探る手がかりになりそうだと思います。今後の課題です。



シロオビヒメが見られる新道コース イネ科植物が見られる



7合目キンロバイで吸蜜 2017・6・17



5合目の♀ 2017・6・17



新道コースの♀ 2022・6・18

定山溪のシロオビヒメ

さて、シロオビヒメといえば準絶滅危惧種の定山溪亜種のことになります。北大虫研時代に八剣山や百松沢の崖部に出向きましたが私は空振りばかりでした。昨年亡くなったT氏の採集記には1974～76年、百松沢で毎年数頭ずつ採集しており1976年に崖が削り取られて、絶滅の危機と書かれていました。今はどうなっているのでしょうか。2021年に教育大のA先生と芝田氏の情報をもとに豊平峡に行ってきました。7月4日のことです。駐車場からなんだか放置されたような山道をダムの方に向かっていきます。左側に火山噴出物が固まった崖が出てきます。このへんかなとキョロキョロしていると足下から飛び出しました。裏面白帯は確かに細く亜種の特徴が出ています。発生の終わりでしょう。カメラに収め1♀だけお持ち帰りで採卵し数卵得ることができましたが越冬中に死亡してしまいました。食草はヒメノガリヤスでしょうか。とにかく生き延びてほしいのですが、環境は不安定と言わざるをえません。心配です。

生息地の崖



♀(上)にアタックする♂



定山溪亜種♂



探雌飛翔する♂



同左

十勝のシロオビヒメ

最後に本場道東のシロオビヒメについて見てみます。絶滅が心配されるカラフトヒョウモンとチャマダラセセリの状況を調べに毎年十勝地方に出かけています。その調査の傍らいつもシロオビ君は元気に迎えてくれます。河川の堤防沿いや植林地の作業道などの開放的な草原環境に生息しています。十勝地方は雪も少なく春から暖かい日が続くので発生は早く5月中に見られます。写真はすべて忠類周辺のもので、こういう草原を飛んでいる姿を見るとこれが本来の生息環境なのだろうとは思いますが、何を食べているのかまだつきつめていないので、はっきりとは言えないのです。右の写真の道端では外来種のナガハグサやノガリヤス属の混じる草むらに潜り込んで産卵しています。この道東亜種は近年、法面のナガハグサを利用して石狩低地帯を西進、札幌まで進出しています。一方、十勝ではアヤメが咲く湿性草原にもいます。スゲ類を含め食草選択についてまじめに取り組む必要がありそうだと思います。



道端から林縁を飛び回る♂(合成) 2022・6・19 忠類



草原を飛ぶ♂ 2023・6・5



チゴユリで吸蜜 2024・6・8



アヤメの花に止まり交尾 2023・6・5

シロオビヒメは定山溪亜種はもちろんそのほかの産地でも姿を消し始めているようです。生態面では、牧草や法面の貼り芝の外来イネ科植物による攪乱以前の、本来の個体群の食草選択が気になっています。1960年代の高橋昭さんによるヒカゲスゲ、カミカワスゲの記録の再確認もやらねばと思います。いろいろ奥深い美しい地味チョウなのでした。

今はいない富良野なまこ山の個体 2010・6・10



今はいない東川キトウシ公園の個体 2015・6・15



To be continued